

完了報告書

記入年月日 2026年2月16日

採択団体名 公益財団法人日本サッカー協会

■事業概要

基本情報	
事業名	サッカーを通じた防災コミュニティ構築推進事業
事業内容	事業内容① ぼうさい拠点の整備と活用 事業内容② 地域コミュニティにおける防災教育・実践活動 事業内容③ サッカー日本代表戦等の試合会場を活用した防災啓発 事業内容④ 記録・映像化による知見の蓄積と全国発信
事業背景	当協会は、能登半島地震や熊本地震、東日本大震災など、過去の大規模災害における復興支援活動を通じて、被災地の子どもたちの遊び場や心のケアの重要性を強く認識してきた。災害時は、子どもが安心して過ごせる居場所が失われやすく、心身の不調や孤立を招く要因となる。一方で、平時から地域に根ざしたスポーツ活動を通じて顔の見える関係が築かれていれば、災害発生時にも共助が機能しやすい。こうした課題意識のもと、全国的なネットワークと発信力を活かし、日頃からの防災教育とコミュニティづくりを推進するため、本事業を実施する。
コミュニティ 設立の経緯	当協会はこれまで、各地域のサッカー協会とともに、自治体、学校、大学、NPO等と連携し、スポーツによる復興支援活動を行ってきた。2022年からは、防災・復興支援委員会(当時)において、よりよい復興のための防災・減災の取り組みを開始。2025年からは、防災・減災につながる地域コミュニティづくりにつながる「ぼうさい拠点」のプロジェクトを開始し、復興期のみならず、災害直後の応急・復旧の時期に特に子どもの居場所・遊び場・スポーツの場を設けることができるよう、またそのためにサッカーによる防災・減災のコミュニティの重要性をより多くの方々に知っていただけるよう、全国の都道府県サッカー協会やスポーツ施設等と連携を開始している。
本事業に関する過去の 取り組み内容	これまでの様々な大規模災害時において、国内外から寄せられる非常に多くのサッカーやスポーツを通じた被災地支援の声を受けて、当協会ではこれまで、チャリティマッチの開催や、被災地の学校等を訪問し子どもたちに希望を与える「スポーツこころのプロジェクト」などの取り組みを行ってきたが、事前の防災の取り組みはほとんど実績がなかった。過去の大規模災害における支援活動の記憶や教訓を活かし、各拠点や関連する地域における全国的なコミュニティ防災教育の重要性を認識し本年度より検討を開始した。
事業体制	・公益財団法人日本サッカー協会:事業全体の統括・企画・広報 ・都道府県サッカー協会、各種施設:地域拠点での運営協力、地域における各種調整 ・地方自治体:拠点設置・イベント実施における連携 ・大学・有識者:防災教育プログラムの助言・検証・トライアル実施
全体スケジュール	<9月~10月中旬> ・各自治体・施設管理者との協議 ・千葉県拠点(JFA 夢フィールド)設置準備 ・日本代表戦等での防災啓発活動開始 <11月~12月下旬> ・熊本県拠点(熊本県フットボールセンター)オープニングイベント準備・実施 ・各地イベントでのトレーラーハウス・キッズピッチ展開 ・防災教育映像の制作

事業目標・事業成果	
事業目標全般 (教育提供者側)	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツと防災教育を組み合わせた実践モデルを構築する ・全国展開可能な「ぼうさい拠点」運営ノウハウ(平時の活用事例)を蓄積する
事業成果全般 (教育提供者側)	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道、福島県、千葉県、熊本県の4地域における拠点設置推進 ・防災教育コンテンツ(パネル、防災カード、映像)の検討 ・自治体・大学・地域団体との連携を具体化(札幌市、北海道浦幌町、福島県、千葉市、静岡県、静岡県富士市、熊本市、熊本県嘉島町、東京藝術大学、幕張ベイタウン自治会連合会ほか)
事業目標全般 (参加者側)	<ul style="list-style-type: none"> ・サッカー試合会場での観戦時において、過去の大規模災害の記憶や教訓を知る ・防災教育映像の上映や防災カード配布により、子どもと保護者が一緒に防災について考える
事業成果全般 (参加者側)	<ul style="list-style-type: none"> ・実際のスポーツ施設や試合会場における防災教育イベントを10回実施し3,500人が参加 ・元日本代表選手がのべ15人参加し、来場者と一緒に防災ワークショップへ参加した ・東京藝術大学のワークショップを国立競技場と熊本防災拠点で行い、アートによる防災教育を実践するなど、多様な主体が活動に参加し、コミュニティ防災教育の可能性を拡大
展開できる 知見やノウハウ	<ul style="list-style-type: none"> ・新たに制作した日本代表の写真を用いた防災カードや映像上映、パネル展示等により、サッカー経験の有無にかかわらず、親子で参加しやすい雰囲気の中で、防災意識を高めるノウハウを得られた。
コミュニティ防災教育の重要な観点	<p>本事業を通じて、地域で防災教育を進めるうえで特に重要であると認識した観点は以下のとおり。</p> <p>(1) 防災教育を「特別な学び」ではなく、日常的な活動(たとえばサッカー観戦やスポーツ交流の場)の延長として位置づけること。サッカーという多くの方々にとって身近なスポーツを入口とすることで、防災に関心の薄い層や、これまで防災訓練に参加したことがない子どもや保護者も、自然に参加することができた。</p> <p>(2) 子どもを中心に据えた防災教育が重要であること。災害時に後回しになりがちな、子どもにとって安心して過ごせる居場所や遊びの機会が確保されることは、心身の健康を守るうえで不可欠。また、周囲の大人にとっても子どもの元気な声はその後の復興への希望につながる。ぼうさい拠点の「トレーラーハウス」や移動式コート「キッズピッチ」を活用し、子どもが主体的に参加できる環境づくりを重視したほか、過去の報道映像等も活用し、災害時のスポーツの必要性を子ども視点でまとめた。</p> <p>(3) 平時からの顔の見える関係づくりが防災力向上に不可欠であること。自治体、地域団体、学校、大学、サッカー協会関係者など、多様な主体が平常時から関わり合うことで、災害発生時にも役割分担や連携が円滑に行える土壌が形成できる。本事業では、イベントやワークショップを通じて、こうした関係構築を意識的に進めた。</p> <p>(4) 地域特性を踏まえた防災教育展開の必要性。雪害、液状化、原子力災害、豪雨災害など、地域ごとに想定されるリスクは異なるほか、過去に大規模災害の被災経験の有無も非常に大きな地域差としてみられた。画一的な内容ではなく、各地域の経験や課題に即したテーマ設定が有効。</p> <p>北海道・・・冬季の雪対策が災害支援においても不可欠(拠点設置にあたって、地域との協議を実施)</p> <p>東北・・・東日本大震災後の復興教育・安全教育の中で、高い防災意識があり、他地域とのつながりの中で共助文化醸成を促すことも有効。</p> <p>首都圏・・・首都直下型地震への備えと住民への周知が課題。千葉拠点の地域コミュニティと連携し、幕張海浜公園での防災イベントを通じ、今後もサッカー×防災のコミュニティづくりを推進。</p>

<p>残課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼうさい拠点の設置調整 ぼうさい拠点は今年度5箇所のうち4か所(北海道、福島、千葉、熊本)整備済み。1月に北海道、2月に福島へ設置予定。今後は先行事例の共有や運営マニュアルの整理を進め、調整負担の軽減を図りながら、設置後のフォローアップを継続していくことが課題。 ・評価手法の確率 イベント参加者の防災意識や行動変容をどのように定量的に把握するかについては、評価手法がまだ十分に確立されていないが、今後、社会的インパクト評価を別途推進し、3月までにサッカーを通じたコミュニティ防災教育の成果も可視化していく。 ・現場負担の軽減 トレーラーハウスやキッズピッチの運搬・設営には一定のノウハウが必要であり、子ども支援における事前防災の要となる。継続的な全国展開を見据えた場合、地域側での担い手育成や役割分担の明確化、防災活動への持続可能な地域で運用できる資金確保と、設置後の継続的な支援が必要。今後は、引き続き、防災ワークショップのモデルケースを開発しながら、都道府県サッカー協会の組織力強化等の支援の検討も必要。 ・情報発信 防災教育の発信がイベント来場者が中心になりがちであり、日本全国のサッカーのコミュニティへの波及にはさらなる工夫が必要。今後は、学校や地域団体との連携を強化し、地域内でも自走できる日常的な防災教育活動へとつなげていきたい。
-------------	--

■事業内容

事業内容① ぼうさい拠点の整備と活用	
<p>事業内容①目標 (提供者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・移動型トレーラーハウスを核とした「ぼうさい拠点」の運営モデルを確立し、全国展開可能な実践ノウハウを蓄積 ・自治体、地域団体、大学等との連携体制を構築し、災害時に迅速に子どもの居場所支援を開始できる体制確立 ・スポーツを通じたコミュニティ防災教育プログラムを検証し、次年度以降の継続につなげる。
<p>事業内容①目標 (参加者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼうさい拠点の体験を通じ、災害時に子どもの居場所が果たす役割について理解を深める。 ・親子で防災について話し合うきっかけを得て、家庭内での備えにつなげる。 ・地域の防災活動やコミュニティへの参加意識を高める。
<p>事業内容① ぼうさい拠点 オープニング (JFA 夢フィールド 10/11,11/15)</p>	<p>■具体的な取り組み内容</p> <p>千葉市の JFA 夢フィールドにおいて、ぼうさい拠点のオープニングとしてトレーラーハウスおよびキッズピッチを設置した。日本代表のトレーニング見学に合わせた「JFA 夢フィールドデー」活動と連動し、来場者が自然な形で防災展示や体験に触れられる環境を整備した。トレーラーハウス内では、過去の災害の教訓や子どもの居場所づくりの重要性に関するパネル展示や映像上映を行い、スタッフが来場者へ説明を行った。キッズピッチを活用した「ゆめのための教室」を能登半島地震の被災地のサッカーチーム18組ほか小学校低学年の子どもたちを対象に実施した。また、能登半島地震の被災地支援活動で連携した神奈川県のとあい焼き炊き出しボランティアにもご参加いただき、元日本代表永島昭浩氏とともに実際の被災地で行われた活動を再現した。</p> <p>「JFA 夢フィールドデー」を初開催 10月11日(土)高円宮記念 JFA 夢フィールド</p> <p>■成果(提供者 or 参加者)</p> <p>提供者側としては、拠点設営から運営までの一連の流れを実践的に検証し、今後の標準化に向けた課題整理が進めた。参加者側においては、サッカー日本代表応援イベントを目的に来場した層にも防災の取組みを届けることができ、親子でワークショップに参加する姿も見られた。</p>
<p>事業内容① ぼうさい拠点 開設イベント (熊本県フットボールセンター 11/30)</p>	<p>■具体的な取り組み内容</p> <p>熊本県嘉島町において、自治体、地域関係者や消防団、保育所等と連携し、ぼうさい拠点の開設イベントを実施した。キッズピッチを活用した子どもの遊び場づくりとあわせ、災害時の共助や地域連携の重要性について説明を行った。地域の実情を踏まえ、豪雨災害や熊本地震の経験を踏まえた内容とした。また、隣接する熊本市との連携で、熊本市現代美術館館長で、東京藝術大学学長の日比野克彦氏による防災グッズを使った人形劇のワークショップが行われ、熊本市職員(講座受講生)が同施設内の保育所において、子どもたちに対して人形劇を披露した。</p> <p>2025年11月23日「COSMOSが日本サッカー協会の防災拠点に」 FMK 熊本復興応援プロジェクト ~with~ (地元 FM ラジオ局による紹介)</p>




防災拠点のトレーラーハウス前で実施した、「ゆめのたねの教室」



神奈川県のとあい焼き炊き出し実演に参加する永島昭浩さんと能登半島から招待した小学生サッカーチーム



地域団体も多数参加して行った防災拠点オープニングイベント

	<p>■成果(提供者 or 参加者)</p> <p>提供者側では、地域主体での運営に向けた役割分担や連携方法を具体化することができた。設置場所の嘉島町のほか、隣接する熊本市の危機管理やスポーツ関連の部局の職員も多数来場し、来年の熊本地震10年を前にサッカーをハブとした自治体を越えた連携の場となった。</p> <p>参加者側では、子どもが安心して遊べる環境を体験することで、災害時にも同様の居場所が必要であるという理解が深まった。また、フットボールセンターが単にサッカーをする場ではなく、非常時に救援拠点として機能することや、日頃からのスポーツ活動でのつながりが重要であることを認識していただくことができた。</p> <p><u><自治体と連携した初のぼうさい拠点を熊本県に設置> いつどこでどのように起こるか分からない大災害に備え、JFAでは日本財団の助成を受けて、全国にスポーツによる災害時の子ども支援の拠点となる「ぼうさい拠点」を今年から整備しています。(JFA公式「X」アカウントより)</u></p>	 <p>熊本市職員による防災グッズを使った人形劇の様子(防災拠点設置場所の保育所内)</p>
<p>事業内容①を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イベント自体がこれまで経験がないものであり、準備に時間を要した。 ・運営スタッフの確保が困難で、十分な人数を確保できなかった。 <p>■乗り越えた方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トレーラーハウス運搬については、協力いただける運送会社と調整し、試行錯誤しながら対応。 ・運営スタッフは、できるだけ別のイベントとの抱合せや地域主体での準備を促すことで、効率的に実施できるようにした。 	
<p>事業内容①を実施する上で工夫した点</p>	<p>本事業では、防災を前面に押し出した啓発にとどまらず、サッカーや遊びを起点とした体験の中に防災の要素を自然に組み込む構成とした点を工夫した。具体的には、キッズピッチでの遊びやイベント参加の導線上にトレーラーハウスを配置し、来場者が無理なく展示や説明に触れられるようにした。</p> <p>また、各地域がこれまでに経験してきた災害の特性を踏まえ、説明内容や展示テーマを一部調整することで、「全国共通の防災」ではなく「その地域の防災」として伝えることを意識した。さらに、自治体職員や地域団体の関係者にも運営に参画してもらうことで、将来的に地域主体で継続可能な拠点運営につながるよう配慮した。</p>	
<p>事業内容① 残課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼうさい拠点の設営・運営については、会場条件や地域事情による差が大きく、一定の品質を保ちながら展開するための運営マニュアルやチェックリストの整備が今後の課題。 ・トレーラーハウスやキッズピッチの設置・撤収に関する人的負担が大きく、継続的な全国展開を見据えると、地域側で担える役割の整理や担い手育成が必要。 ・中間時点では、拠点体験後の参加者の行動変容(家庭での備えや地域活動への参加)を十分に把握できていないため、アンケートやヒアリング等を通じた効果測定方法の確立が求められる。 ・今後は、先行して整備した拠点で得られた知見を他地域へ共有し、拠点間の横のつながりを強化することで、より効率的で持続可能な運営体制の構築を目指す。 	
<p>事業内容② 地域コミュニティにおける防災教育・実践活動</p>		
<p>事業内容②目標 (提供者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼうさい拠点周辺地域や過去の被災地において、防災教育を地域主体で実践できるモデルを構築する。 ・自治体、学校、地域団体、大学等との連携を通じ、スポーツを活用した防災教育の実施ノウハウを蓄積する。 ・平時からの交流を通じ、災害時に円滑に機能する共助体制の基盤を整える。 	
<p>事業内容②目標 (参加者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・防災を特別な取組ではなく、日常の延長として捉える意識を醸成する。 ・地域の災害リスクや過去の被災経験について理解を深め、自身や家族の備えを見直すきっかけとする。 ・地域コミュニティや防災活動への参加意欲を高める。 	

■具体的な取り組み内容

・南三陸町

東日本大震災の被災地である南三陸町の平成の森グラウンドにおいて、南三陸町サッカー協会主催のだけでも参加できるウォーキングフットボールイベントと連動し、防災啓発ブースを展開した。外国人を含む多様な参加者が、年齢や経験を問わず同じフィールドで交流できる場を設け、防災を通じた多文化共生と地域コミュニティの再確認を図った。(写真右)

・熊本



また、熊本地震から10年を迎える熊本市の中心地で2日間で1万人以上が参加するサッカーイベントが行われ、防災拠点のトレーラーハウス、キッズピッチを実際に運搬し展開し、来場者へ防災教育の場を設けた。

・札幌



北海道では、北海道に整備予定の防災拠点のトレーラーハウスを用いて、札幌市が札幌ドームで開催したスポーツイベント会場で防災教育を展開した。約6千人が来場し、キッズピッチを体験した子どもたちが防災教育映像を見て学ぶ流れを作った。

<https://www.instagram.com/reel/DTKQm-pkTJS/>
(札幌ドームスポーツイベント主催者による投稿)

■成果(提供者 or 参加者)

提供者側では、スポーツイベントと防災教育を自然に組み合わせる実践手法を検証することができた。参加者側では、身体を動かしながら交流することで心理的なハードルが下がり、防災に関する会話や地域の記憶を共有する機会が生まれた。また、東日本大震災をはじめとする各種大規模災害を経験していない小学生も、サッカーのコミュニティが大規模災害時に重要な役割を担えることを学ぶ機会ができた。



ハラル対応の炊き出し



ウォーキングフットボールで交流



東日本大震災の被災地支援のサッカークラブの旗とともに大人も一緒に参加



地域の大人が子どもたちの声を聞きながら防災について考える時間を設けた

事業内容②
防災啓発ブース
の設置
(実施日:南三陸
町 10/5、札
幌市 1/6-7、
熊本市
1/10-11)

<p>事業内容② 防災ワークショップ (実施日:10月～1月東京藝術大学)</p>	<p>南三陸町では、ハラル対応の炊き出しも行われ、東日本大震災後の在留外国人とともに地域住民が主体的にこれからの災害に備える活動も新たに実施できた。</p> <p>■具体的な取り組み内容 東京藝術大学と連携し、トレーラーハウスの防災拠点を平时的の活用として、防災ワークショップのデザインを考へてもらう機会を設けた。</p> <p>■成果(提供者 or 参加者) 提供者としては、トレーラーハウスの活用方法を、学生の視点から提案してもらい、スポーツとアートを用いた実践的な活動とすることができた。</p> <p>参加者側としては、防災を身近に考え、特に子どもも含めて誰も取り残さない共生社会にアートを活かす視点で学びを得られた。実際に皇后杯決勝に出展し、多くの来場者に体験していただくことができた。</p>	
<p>事業内容②を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・南三陸町では、イベント参加の主目的がウォーキングフットボールであったため、防災ワークショップの組み込み方が難しかったが、イベントの最後に実施できた。 ・外国人参加者への呼びかけを行ったが、結果的に地域の路線バスが急きょ運休となり、参加が難しかった。 <p>■乗り越えた方法</p> <p>交流の最後の時間にワークショップの時間を20分間設けた。長年被災地支援活動を行っている「ちょんまげ隊長つんさん」が進行をリードし、子どもたちが積極的に意見を出し合えるようにした。</p> <p>外国人参加者には、そのコミュニティへ南三陸町サッカー協会から呼びかけが行われた。イベントを開催された他当社は、今後も継続してトライしていきたいと話していた。</p>	
<p>事業内容②を実施する上で工夫した点</p>	<p>東日本大震災で甚大な被害があった地域において、大人から震災の記憶を一方向的に伝えるのではなく、参加者の子どもたち自身もこれまで学んだことや思いを語り、自然と防災について考える時間を設けた点の特徴。特に、インクルーシブなスポーツ交流と組み合わせ、大人と子どもも混ざり合う交流の場をつくることで、世代を超えたコミュニケーションが生まれ、大人も学校で子どもたちが学んでいる防災教育のことを知り、家庭内でも自分事として捉えやすくなるよう工夫できた。</p> <p>また、東京藝術大学ではほとんどの学生が大規模災害の被災経験や支援経験がなく、創造の中で取り組んでいたが、途中で事業内容③の皇后杯決勝での活動が追加となり、実際の被災者からの話を聞くなどし防災についてより一層学ぶ機会となった。</p>	
<p>事業内容② 残課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内で継続的に防災について考える機会づくり(毎年の定期開催) ・外国人住民を含む多様な参加者に対する、より分かりやすい情報提供方法の検討。(事前の参加者募集含む) 	

事業内容③ 試合会場を活用した防災啓発・発信	
<p>事業内容①目標 (提供者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・サッカー日本代表戦等の高い集客力・発信力を活用し、防災教育の認知拡大と社会的理解の促進を図る。 ・試合会場という非日常空間においても実施可能な、防災啓発の運営手法・導線設計のノウハウを蓄積する。 ・拠点事業や地域コミュニティでの取組みを全国へ発信し、広域的な防災コミュニティ形成につなげる。
<p>事業内容①目標 (参加者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・災害への備えや被災地支援について関心を持つきっかけを得る。 ・防災を自分や家族に関わる身近なテーマとして捉え直す。 ・スポーツを通じた防災・共助の取組みに対する理解を深める。

事業内容①
防災
ワークショップ
(10月・11月)

■具体的な取り組み内容

10月から11月にかけて開催された各種日本代表戦および主要大会の試合会場において、防災啓発ブースを設置し、来場者を対象とした防災教育・情報発信を一体的に実施した。ビーチサッカー、フットサル、男女日本代表戦、国内主要大会といった多様な競技・カテゴリの試合会場を活用することで、幅広い年齢層・地域の来場者に対して防災への関心喚起を行った。

各会場において、防災啓発ブースを設置し、過去の災害の教訓や災害時の子どもの居場所づくりの重要性について、パネル展示やスタッフによる声掛けを通じて発信した。会場特性に応じて、トレーラーハウス展示または簡易ブース形式を採用し、試合前後やハーフタイムなど来場者の動線を意識した配置とした。日本代表OBOGも参加し、トップアスリートによる発信や来場者への意識付けも心がけた。

【実施会場・日程】

・10月4日(土)・5日(日) ビーチサッカー日本代表 沖縄県/西原きらきらビーチ

ビーチサッカー日本代表戦会場において、防災教育のパネルを用いたワークショップを行い、日本代表ファン・サポーターと試合観戦時に地震があった場合の備えや、日頃からの備えを考え、さらに普段からの地域でのつながりやサッカーのコミュニティの大切さを知る一連のプログラムを構築した。

・10月10日(金) SAMURAI BLUE キリンチャレンジカップ 大阪府/パナソニックスタジアム吹田

ビーチサッカー日本代表戦会場で構築したプログラムを、その後の南三陸町での活動を経て調整した後、これまでの当協会の被災地支援の映像を上映するなど、コンテンツを追加し、内容面の充実を図った。

・10月14日(火) SAMURAI BLUE キリンチャレンジカップ 東京都/東京スタジアム

ブラジルとの試合には、平日にもかかわらず非常に多くのファン・サポーターが来場し、ワークショップへ参加していただいた。中には、普段からのJリーグクラブにおける社会貢献活動への参加と関連付けて参加されるサポーターの姿もあり、サッカーのコミュニティにおける防災教育の広がりの可能性を感じられる場となった。

・10月17日(金)・19日(日) フットサル日本代表 静岡県/北里アリーナ富士

開催地の富士市のスポーツや防災の関係者との連携が新たに生まれた。今後の防災活動の地域への展開の可能性を考えることができた。



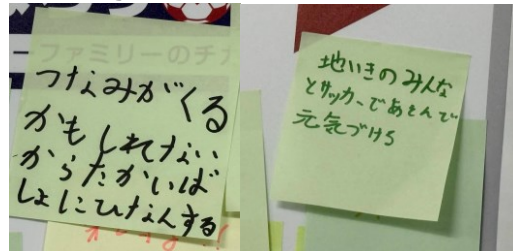
パネルと付箋を用いたワークショップには、日本代表ユニフォームを着た子どもたちが多数参加



試合場で災害が起きたときの命を守る行動の大切さと、日頃からの備えやコミュニティのつながりの重要性を考えるワークショップのプログラムを新たに構築



来場したファン・サポーターからの非常に多くの付箋のメッセージが寄せられた



付箋の内容は、試合開催地域によって大きな違いがみられ、地域で想定される災害や、過去の地域における被災有無等

・11月14日(金) SAMURAI BLUE キリンチャレンジカップ 愛知県/豊田スタジアム

スタジアムに隣接する河川敷に、トレーラーハウスとキッズピッチを展開した。開催地の豊田市と、トヨタ自動車にご協力いただき、バリアフリーのトイレカーを展開し、子どもからお年寄りまで、性別や障がいの有無にかかわらず、試合前にサッカーの楽しさを感じる場を設けることができた。トイレカーの運用に関する課題を開催地のサッカー協会とともに自治体やスタジアムとの調整の中で検討した。

・11月18日(火) SAMURAI BLUE キリンチャレンジカップ 東京都/国立競技場

・11月22日(土) 天皇杯 JFA 全日本サッカー選手権決勝 東京都/国立競技場

国立競技場で行われた2試合において、トレーラーハウスを展開し、来場者へ防災教育の場を設けた。また、天皇杯決勝においては、キッズピッチを試合会場のピッチレベルに展開し、子どもたちに実際のボールを蹴る場を設けた。

・11月29日(土) なでしこジャパン MS&ADカップ 長崎県/長崎スタジアムシティ

熊本のぼうさい拠点オープニングイベントを翌日に控え、その備品を長崎へ運搬しワークショップを開催した。当協会が実施した能登半島地震復興支援金募金へ自主的に協力した、長崎南山小学校の生徒を試合会場へ招き、防災教育の場を小学生とともに運営する試みを行った。小学生は熱心に来場者へワークショップの流れを説明し、来場者も真剣にコミュニティ防災の大切さを考える場となった。

・1月1日(火・祝) 皇后杯 JFA 全日本サッカー選手権決勝 東京都/国立競技場

能登半島地震から2年となる元日の女子サッカーの頂点を決める試合会場で、天皇杯決勝に続きトレーラーハウスを設置し、以下の4つのワークショップを展開した。

・JFAの防災復興支援活動紹介(映像上映)

・サッカーのチカラ写真展

・ハートマートビューイング

・DOORプログラム実践演習

[決勝イベント情報](#)

■成果(提供者 or 参加者)

提供者側では、異なる競技・会場条件においても共通して実施可能な防災啓発の基本構成を整理することができた。

参加者側では、試合観戦をきっかけに防災情報に触れる機会が生まれ、被災地支援や日頃の備えについて関心を示す来場者が多く見られた。

も考慮した調整も大切であると感じた



皇后杯決勝会場のサッカーのチカラ写真展においては、日本代表サポーターの、ちょんまげ隊長つんさんが、これまでに行ってきた被災地支援活動を、写真の展示でご紹介。現在も継続している能登半島地震のほか、2011年東日本大震災や、2016年熊本地震、2019年台風19号などの国内の被災地支援はもちろんのこと、エチオピアやネパールの大地震の被災地においても、サポーターのチカラを集結させ、現地で活動しており、試合会場では、写真の展示とともに、実際の被災地支援活動のことをお話しいただき、サッカーにどんなことができるかを一緒に考えた。能登半島地震で被災した家族を招き、被災経験を伝え来場者とともに考える取り組みも行った。



東京藝術大学の講座受講生による防災ワークショップの実践活動



元なでしこジャパンの鮫島彩さんも参加し、一緒にワークショップへ参加

<p>事業内容①を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来場者の主目的が試合観戦であるため、長時間の説明が難しく、短時間で関心を引く工夫が必要であった。 ・会場規模や混雑状況により、十分な対応が行えない時間帯が生じた。 <p>11月以降は4試合の会場へ防災拠点のトレーラーハウスを運搬し、実際の災害時に想定している子どもの遊び場づくりを実践したり、来場者への発信の場として有効に活用した。</p> <p>■乗り越えた方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視覚的に分かりやすい展示や簡潔なメッセージを用い、短時間でも要点が伝わる構成とした。 ・スタッフ間で役割分担を行い、混雑状況に応じて柔軟に対応した。
<p>事業内容①を実施する上で工夫した点</p>	<p>競技や会場ごとの特性を踏まえつつ、防災啓発の基本メッセージを共通化することで、複数会場での同時多発的な実施を可能とした。また、スポーツ観戦の高揚感を損なわないよう、前向きで参加しやすい表現を意識した。</p> <p>1月1日の皇后杯決勝は能登半島地震から2年の日であったことから、これまでの被災地支援でつながりのあった団体に協力いただき、輪島市と能登町の家族を試合会場へ招き、来場者へ被災体験や支援活動の記憶や教訓を伝えていただいた。</p>
<p>事業内容①残課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・限られた時間の中で、来場者の行動変容までつなげる手法の検討が必要。 ・今後は映像やデジタル媒体も活用し、試合会場外への波及を強化していく必要がある。
<p>事業内容④ 記録・映像化による知見の蓄積と全国発信</p>	
<p>事業内容②目標 (提供者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本事業で得られた実践事例や知見を記録・映像化し、今後の防災教育や災害対応に活用可能な資産として蓄積 ・映像や記録を通じて、サッカーを通じた防災・復興支援の取組みを全国へ発信し、活動の再現性を高める。 ・子どもや若年層にも伝わりやすい防災教育コンテンツを整備。
<p>事業内容②目標 (参加者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・映像や記録を通じて、防災や被災地支援への関心が高まる。 ・過去の災害の教訓や、平時からの備えの重要性について理解を深まる。 ・スポーツを通じた防災・共助の取組みを知る。

<p>事業内容② 防災啓発教材 の整理・活用 (11月・12月)</p>	<p>■実施概要 ぼうさい拠点での活動、地域コミュニティでの実践、試合会場での防災啓発について、写真および映像による記録を行い、防災啓発教材および活動記録として整理・活用した。各活動の様子を単発で残すのではなく、事業全体の流れや背景が伝わる構成を意識して記録を行った。</p> <p>■具体的な取り組み内容 ・各地のイベントや拠点活動の様子を撮影し、記録映像として編集。 ・過去の災害の教訓や子どもの居場所づくりの意義を伝える防災啓発映像を制作。 1月以降のすべてのイベント会場で上映している。</p> <p>当協会の防災・復興支援活動情報ページへ掲載 がんばろうニッポン！ ～サッカーファミリーのチカラをひとつに！～</p>	 <p>親子で学ぶ防災教育映像</p>  <p>防災・復興支援の考え方紹介映像</p>
<p>事業内容②を 実施する中で 発生した課題や 失敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点 ・活動内容が多岐にわたるため、映像の取捨選択や構成整理に時間を要した。 ・限られた時間で撮影を行う現場もあり、十分な記録が難しい場面があった。</p> <p>■乗り越えた方法 ・事前に撮影方針や重点テーマを整理し、記録の優先順位を明確にした。 ・複数の活動を横断して活用できる共通映像素材を意識的に収集した。</p>	
<p>事業内容②を 実施する上で 工夫した点</p>	<p>単なる活動記録にとどまらず、子どもや若者にも伝わりやすい表現やテンポを意識した映像構成とした。また、災害の記憶と現在の取組みをつなげることで、防災を「過去の出来事」ではなく「今につながる課題」として伝える工夫を行った。</p>	
<p>事業内容② 残課題等</p>	<p>・映像の効果測定(視聴数や理解度の把握)については今後の検討課題。 ・学校教育や地域研修等への展開方法を検討。</p>	